る話ですね。ボランティアには、大きな目標に向けて無償で手伝う人と、自分たちの自己実現のためにやる人がいます。後者をわかりやすく言うと“掃除はしたくないが皆の前で演奏会はしたい”ですね。それぞれが活躍できるシステムが整うと、『水都大阪』の後の中之島公園も賑わうのではと思います。また『船場げんきの会』のように、それぞれの地域でプラットフォームがありますが、各プラットフォームを結びつけるのに最初にやるべきことは、泉さんや室井さんからも提案があったように、『水都大阪』の全体ビジョンを話し合うことではないかと思います。将来こういう大阪になったらいいね、という話し合いは、イメージの共有のために必要ですね。

山部　先ほどからプラットフォームの話が出ていますが、ミナミはいかにも大阪らしいところで、『ミナミまち育てネットワーク』にもいろいろな方々が参画していただいています。今までは官があって企業があって市民があって、と、それぞれが別々の世界にいた感じがするんですが、ここでは企業も一市民。これからのまちづくりとしては、企業の従業員が地域に参加したい活動があれば、それは福利厚生として参加させる。従来のように協賛金や寄付などを募る形はもう古いと思いますね。

大西　『船場げんきの会』では苦労もありましたが、5年間の積み重ねで、大勢の人を巻き込み面白いことがやれました。これを集約し、都市の活力や経済発展にどう結びつけていくか。そのために民と官の役割を追求していきたい。

伴　『平成OSAKA天の川伝説』も今年7月に本格実施します。昔から言うじゃないですか「大阪の血沸き肉躍り骨笑うまでやろか」と(笑)。まつりは理屈やないんです。天神祭だって面白いから1058年間も皆がお金を出し合って、民がプロデューサーになって開催しています。大阪でも何が文化なのか原点を探りながら、いろんなことを仕掛けていきたいですね。水の都じゃなく、目隠しをして「見ずのみやこ」にならんように(笑)。

佐藤　さまざまなご意見、どうもありがとうございました。

関西・大阪文化力会議　合意事項

本会議は山崎正和氏と加藤恒夫氏の基調講演「関西・大阪文化振興について」、「文化力を高め、地域を豊かに」を受け、各分科会で以下の方向性を確認した。

社学連携(第1分科会)

■いま、大学には社会・経済への貢献、知的蓄積の社会還元が求められている。一方、合理主義一辺倒のパラダイムから脱却し、生きていくために必要な“知恵”を学ぶ場を望む声も大きい。

■多様な学びの場を大学および地域に展開することで、多彩な人材を育成し、芸術や文化の裾野を広げ、情報力や知的体力のあるコミュニティを醸成していく。大阪が育んだ懐徳堂精神を発揮し、地域に市民が自発的に学ぶ場、創作や表現活動の場づくりを、官民一帯となって進める。

大阪の守るべきもの(第2分科会)

■伝統とは、単に古いものを守ることではなく、革新との関係性で捉えるべきもの。時代の感性や情勢に合わせて変え続けていかなければ残っていかない。天神祭をはじめ、大阪の祭事には、観客を夢中にさせるコミュニケーションの仕掛けが込められている。こうした知恵や工夫、アイデアやノウハウに目を向け、再活用・復興し、新たなストーリーを付与して“伝統”を活性化することが必要。

■大阪・関西の都市格向上のキーコンセプトとして、(関経連の提唱する)「はなやか関西」を挙げたい。「はなやか」には、美しい、きらびやかというだけでなく、際立っている、くっきりしているという意味が込められている。文化とは、心の満足を与えるもの。住み手が満足している所には、遠くからも人が集まってくるもの(近きが喜べば遠きより来る―『論語』)。そんな、活力ある「はなやか関西」を、市民が中心的な担い手となって構築していく機運を盛り上げたい。

誰が支える大阪の文化(第3分科会)

■関西が育んできた固有の文化は、いま絶滅の危機に瀕している。グローバルな都市間競争がいっそう激化する中で「文化のないまちは崩壊する」という危機感を持ち、関西は文化による都市活性化を最重点戦略と位置づけるべき。

■文化活動には、行政からの補助に加え、企業メセナの振興も必要である。さらに、関西人が培ってきた町衆精神を呼び覚まし、市民による文化サポーター「市民タニマチ」運動を提案する。マネジメント手法を進化させ、伝統を守りつつ新たな創造に取り組み、広く市民の理解を得る自助努力が必要。

民がつくる大阪のまち(第4分科会)

■文化力を生かしたまちづくりのためには、市民やNPOの知恵や力を発揮できるプラットホーム(中間組織)の育成と、これらのプラットホームがゆるやかに連携できる場づくりが急務である。自治体にはこうしたプラットホームに対応するワンストップ窓口の開設を求める。

■これからの都市づくりには、民や主体となったビジョンづくりが欠かせない。「水都大阪2009」の開催は、市民に新たなライフスタイルの可能性を予感させた。水都再生の機運をさらに醸成するには、市民が共感し、参加したくなるような、民の発想で生まれた行事を継続、発展させていくことが大切であり、市民を挙げて以下のことを支援する。

・「なにわ淀川花火大会」
・「平成OSAKA天の川伝説」
・「水都大阪2009」のシンボル「ラッキードラゴン」の活用